

上海外国语大学

学士学位论文

题目:

学 院 继续教育学院

专 业

姓 名

班 级

应毕业年月

完成日期 年 月

封一（论文扉页）

论有岛武郎的自然描写
——以“海”为例
(上空五行，宋体、三号加粗)

上海外国语大学继续教育学院日语专业

本科学位论文

刘某某

指导老师：XX

XXXX 年 XX 月

(具体空行如上，宋体小四，文字居中，年月为定稿时间)

上海外国语大学继续教育学院

学士学位论文诚信声明

(一级标题居中，加粗，小三号字，宋体)

(中文每段首行空 2 个中文字符，宋体，小四号，全文两端对齐。)

本人庄重声明：我所呈交的学士学位论文是在指导教师指导下独立完成的。本论文正文中除已标明引用出处内容外，不包含任何其他个人或集体发表的研究成果内容。本人明白并完全承担在论文中引用他人科研成果而不注明出处的严重后果。本人提交给上海外国语大学继续教育学院的查重报告真实有效，如有不实，本人将承担由此带来的一切后果。

特此声明。

声明人签名：

日 期：

补充说明：1. 手动填写本人姓名、年月日。

2. 论文定稿后，红色文字请全部删去。

作为日本白桦派代表作家，有岛武郎在文学创作中展现出对自然的独特感知力与卓越的艺术表现力。其作品不仅以细腻的自然描写见长，更通过象征主义手法赋予自然意象深刻的意义。本文聚焦有岛文学中“海”这一意象的建构，着重探讨美国诗人沃尔特·惠特曼对有岛创作产生的深远影响。

论文主体由三部分构成。首先，考证有岛与惠特曼的文学因缘，探讨了惠特曼诗歌中的“海”意象如何作用于有岛的文学想象。其次，解析有岛创作中“海”意象的象征体系，凸显了“海”作为核心意象在有岛文学中的多重功能。接着，聚焦小说《生来的烦恼》，揭示“海”在具体人物塑造与主题表达中的核心作用。

通过文本细读与比较文学的研究方法，可以看出有岛在继承惠特曼“泛神论”自然观的基础上，将“海”的意象从单纯的景物描写升华为精神救赎的象征载体，这一创造性转化在《生来的烦恼》中达到了艺术表现的高峰。

关键词 有岛武郎；惠特曼；自然；海；生来的烦恼（宋体 小四）

（内容可包括论文的研究背景和目的、具体论题、各章节结构内容以及简单结论，长度不超过1页。）

日本白樺派の代表作家である有島武郎は、文学創作において自然に対する独特の感知力と優れた表現力を示している。その作品は繊細な自然描写のみならず、象徴的手法によって自然のイメージに深い意味を付与している。本稿は有島文学における「海」というイメージに焦点を当て、米国詩人ウォルト・ホイットマンが有島の創作に及ぼした影響について考察する。

本論は三つの部分からなっている。まず、有島とホイットマンの文学的関わりを実証し、ホイットマン詩における「海」のイメージが如何にして有島の文学的想像力に作用したのかを探究する。次に、有島作品における「海」のイメージが持つ象徴的システムを分析し、「海」のイメージが有島文学における多重的機能を明らかにする。さらに小説『生れ出づる悩み』に焦点を絞り、「海」が具体的な人物とモチーフ表現においての役割を解明する。

テキスト分析と比較文学的方法を通じて、有島がホイットマンの自然観を継承しつつ、「海」のイメージを単なる自然描写から精神救済の象徴へと創作させたことが明らかとなった。この創造的転換は『生れ出づる悩み』において芸術表現の頂点に達しているといえる。

（MS Mincho 小四）

キーワード 有島武郎、ホイットマン、海、生まれ出づる悩み

はじめに	1
第一章 有島武郎とホイトマン	2
1.1 有島武郎とホイトマンとの出会い	2
1.2 ホイトマンの「海」	4
第二章 有島武郎の自然	6
2.1 象徴を重んずる作家	6
2.2『カインの末裔』における自然	7
2.3『ある女』における「海」	9
第三章 『生まれ出づる悩み』における「海」	10
3.1「海」の登場	10
3.2「海」と『生まれ出づる悩み』のモチーフ	12
3.3 ホイトマンの「海』とのかかわり	14
おわりに	15
参考文献	16

（目录中标题及页码须与正文完全一致。本页长度 1 页，字体小四，章节符号及页码标识格式如上。）

有島武郎は「白樺派」の代表作家として広く知られている。本格的な執筆生活が極めて短く、七ヶ年足らずで終わったが、凡ての情熱を傾けて、充実した成果をあげた。戦後本多秋五氏、安川定男氏によって、有島の文学全体が本格的に文壇の注目を受け、多様の視点から有島文学を再認識する研究が築かれた。現在にいたって、日本で「有島研究会」があり、会報を発行したり、シンポジウムを開いたりして、作家の作品や人生に関する研究活動が盛んに行われている。一方中国では、初めてその文学を中国に翻訳し、紹介した人は魯迅先生である。今まで有島にかかわる研究は主に社会主義への関心、ヒューマンイズムの思想、リアリズムの傑作『ある女』を中心に行われている。近年来、日中比較文学の視点からの研究も大きな成果を収めた。

私が有島の文学に触れたのはその『ある女』から始まったのである。激しい筆致と小説全体における切迫感がとても印象的であった。それをきっかけに有島の作品及び今までの作家研究に興味を持つようになった。まずその作品に出てきた自然、特に北海道の荒々しい「海」に対する描写に深い感銘を受けた。今まで日本では「有島は自然描写がうまい作家だった。その描写は東洋画風ではない、あくまで西洋近代絵画の迫力を持っている。客観描写に似て必ずしもそうではない」¹や、「視覚ばかりでなく、音響に対する感受性も極めて鋭敏であった」²などと主観的な感想が多いが、具体的に分析したものはあまり見られない。それについて検討を進めていくと、おもしろくて、やりがいがあるのではないかと、いっそう興味をそそられた。

したがって小論はまず有島とホイットマンの文学的関わりを実証し、ホイットマン詩における「海」のイメージが如何にして有島の文学的想像力に作用したのかを探求する。次に、有島作品における「海」のイメージが持つ象徴的システムを分析し、「海」のイメージが有島文学における多重的機能を明らかにする。さらに小説『生れ出づる悩み』に焦点を絞り、「海」が具体的な人物とモチーフ表現においての役割を解明する。まず有島自身がいかにして「海」のイメージを取り入れたか、それから作品の中でどのように描き出しているのかなどを分析してみたい。こういう分析を通じ、有島及び有島文学における自然の完成を浮き彫りにさせたい。

章节标题 MS Mincho 小三 加粗，空一行之后开始正文内容。

正文 MS Mincho 五号，段落开始缩进一个字符。

¹ 松浦武『近代小説の表現』三教育出版センター、1995年、112頁。

² 安川定男『作家の中の音楽』桜楓社、1998年、61頁。

第三章 『生まれ出づる悩み』における「海」

（章节标题 MS Mincho 小三 加粗，之后空一行接正文）

『生まれ出づる悩み』は後に画家として大成した木田金太郎をモデルに書き上げたものである。小説の中には自然と人間の対立と調和までもが描き込まれていて、様々な魅力を備えた作品である。九章からなる小説『生れ出づる悩み』では海難についての描写が特に一章を占めている。漁師の海上生活を想像しながら、力強くリアルに描き出したその場面は、この小説の魅力の一つであり、作者の芸術的手腕が並々ならぬことを示しているところでもある。次は海難事件を中心に、海の登場が作品の主題体现においてどのように象徴的に描かれているのかについて見てみたい。

3.1「海」の登場（小节字号 四号 加粗）

主人公の「君」は漁夫の身でありながら、絵画への未練を捨て難く、二重生活をしている人である。ある年の三月に痛ましい海難事故に遭遇した。「海の上はただ狂い暴れる風と雪と波ばかりだ。（略）力なく漂う船の前まで来ると、波の山は、いきなり、獲物に襲いかかる猛獣のように思い切り背伸びをした」^①。一方、狂暴の自然の真っ直中に頼りなく揉みさいなまれる人間はどうなったのか。

君達は船との縁を絶たれて、水の中に漂わねばならなかった。（略）君の心の底だけが悪落ちつきに落ち付いて、「死にはしないぞ」とちゃんと決め込んでいるのがかえって薄気味悪かった。

怒った自然の前には、人間は塵一とひらにも及ばない。人間などという存在は全く無視されている。それにも係らず君達は頑固に自分達の存在を主張した。雪も風も波も君達を考えに入れてはいないのに、君達は強いてもそれらに君達を考えさせようとした。^②（第六章）（整段引用超过三行，请前后各空一行，左边缩进 2 个字符）

人間が生命の帆をひらきあげようとする「頑固」な「主張」、「死にはしないぞ」という強烈な生命意欲は、狂暴な海（自然）の前にどんなに偉大な存在であるか、読者の心は強く打たれた。小説に述べられているように、「漁夫の生活、それには聊かも遊戯的な余裕がないだけに、命がけの真実な仕事であるだけに、言葉には表わし得ないほど尊さと厳肅さを持っている」。有島は切迫感の強い筆致で、海（自然）と人間との戦いをうきばりにすると同時に、「生死の瀬戸際にはまり込んでいる人々の本能は恐ろしいほど敏感な働きをする」ことを感じて、賛美した。

^① 有島武郎『生まれ出づる悩み』角川書店、1969 年、57 頁。

^② 有島武郎『生まれ出づる悩み』角川書店、1969 年、200 頁。

また恐ろしい自然と戦う真最中、木本は『ある女』の葉子と同じように、一瞬幻覚に耽ってしまったことに注意を払ってもらいたい。「矢よりも早く走っていく一隻の船」が真実のように彼の目に入ったのだ。それを見ると「木本は思わずすすり泣きでもしたいような心持になった」。木本の幻覚を叙述した部分で、有島はその幻の船を「矢よりもはやく走っていく」と五回も繰り返して表現している。生死の隙間に心に浮かんできたこの船はいったいどういう暗示を示すのか、やはりホイットマンと関連に言及すべきだろう。実は、船はホイットマンにとって大きな象徴的な存在である。ホイットマンが詩を書き始めるきっかけはいっぱいに帆を揚げて走る船を見た時だったと言われる。有島は次のように船から暗示を得たホイットマンのことを語っている。

大きな海原をいっぱい帆を揚げて走っていく一隻の船、それはそのまま一つの神秘であり、象徴であります。一人の Loafer なるホイットマンにとっては、その船の陸地から遠ざかっていく姿は、ある屈強な暗示を彼の魂に刻んだに相違ありません。ホイットマンの詩の中ごとに晩年の詩の中には海に乗り出して行く船を歌ったものが数篇ありますが、それらはどれも塩風の匂いを嗅ぎえるような生々とした力強い暗示を含んだ立派な詩であって、真に後世まで残るべき価値あるものであります。^①

清水春雄氏の指摘では、ホイットマンの船は魂を指している。海は魂の船を走らせる場として考えられている。例えば、「船の上、その舳先に」でホイットマンは海で希望の帆を広げている舵手に、輝かしい讃歌を捧げた。

船の上、その舳先に、年若き舵取り、心して舵をひく。
海岸の霧の中に一つの鐘淋しく鳴りひびきつつ、
海原の鐘——おお警めの鐘、その響き波にゆられて、
おお、汝はまことにもまことなる警めを送る、海礁のほとりに鳴り響く鐘よ、
鳴り響きつつ、鳴り響きつつ、船を難破の地点から戒めるために、
されば心たくましく、おお舵取り、お前は鐘の警めに応ずる、
舵はかわす——荷積みした船は、進路を変えて、灰色の帆のもとに馳せて去る、
美しく気高き船は、價高き富を積み、華やかに安らかに馳せて去る、
さりながらおお船よ、不壊の船よ！船の上なる船よ！

^① 有島武郎 「ホイットマンについて」『有島武郎全集』第八、筑摩書房、1980 年、547 頁。

お肉の船——魂の船——帆走りつつ、帆走りつつ。^①

若い舵手は海との戦いの中で自分の運命の舵手となる。それで彼にコントロールされた船は、「気高き船、不壊の船、魂の船」だと謳われる。ホイットマンはこのように魂の高尚、個性の力を肯定したのである。それは木本の幻覚に浮かんできたその船と並べてみると、同じ意味合いで言っているのではないかと思われる。すなわち、生と死の瀬戸際であるだけに、木本が「死にはしないぞ」と心を決めただけに、自分の魂の出航に開眼したのである。あまりの感動に「それを見ると何かが君の胸をどきんと下から突き上げてきた」。だからこそ、救助されたばかりの木本は「なんとも言えない勇ましい新しい力——上潮のように、腹のどん底からむらむらと湧き出して来る新しい力を感じ」て、そして「涙が後ろから後ろへと君の頬を傳って流れた」。なつかしい岩内の町すら「新しく生れ出たままのように立ち並んでいた」ように木本の目に映ったのだ。『ある女』の海と同じように、『生れ出づる悩み』の海もホイットマンの詩の投影があって、生死の流れが交わりつつあるところである。船の航行、つまり魂の航海は命がけの冒険の道であると同時に、真の魂を発見した冒険であり、生への復活をかけた出航である。

3.2「海」と『生れ出づる悩み』のモチーフ

海に対する『生れ出づる悩み』に出てきた陸について、菅谷敏雄氏は「偉善と弥縫を必要悪とする日常的な人間関係の＜場＞である」のみならず、山への愛着がゆえに「超越性と包容性を兼備した、美としての自然を意味する」との指摘がある。このように捉えるとき、『生れ出づる悩み』のモチーフについて、作品の広告文で「自然は大きな産褥だ。私はその産褥の一隅につつましく坐って華やかな誕生を祝する歌手でありたい」という有島の言葉が分かってくるだろう。この小説における自然、特に海は人間と対立した存在のように見えるが、実際は新しい生命、魂の誕生が予想できる場を意味している。「産褥」であるだけに、凄まじい痛み、死の危険を内含するのが当然のことであるように、その中から生の産声が聞こえ、生の喜びが感じてくるのである。同じく木本は海との必死の戦いからしか真の魂に触れ、再生への感激を吟味することができないのであろう。

自然の恐ろしい力について、有島はかつて「自然という大きな力は、私達はそれを如何に征服し、如何に共和していくべきかをはっきりと知ることができないので常にその間に模索の生活を続けている。それは痛ましい人生の葛藤の一つだ」^②と言った。しかし、『生れ出づる悩み』では、海の登場はむしろ人間と融合し、真の人間が誕生する場であり、悲壮、厳粛な様相を備えている。小説の最後で、有島はこのように木本のことを述べている。

^① ホイットマン「船の上、その舳首に」（有島武郎訳）『有島武郎全集』第6巻、築摩書房、1980年、304頁。

^② 有島武郎『有島武郎全集』第七巻築摩書房、1980年、424頁。

君のような人が――全然都会の臭味から免疫されて、過敏な神経や過量な人為的知見に煩わされず、強健な意力と、強靱な感情と、自然に育まれた叡智とを以って自然を端的に見ることができる君のような土の子。^①

明らかに木本は自然の子のように表現されている。つづいて有島は木本の悩みについて、「君が唯一人で忍ばなければならない煩悶――それは痛ましい陣痛の苦しみである」と語っている。つまり、木本は自然と対立する人間ではなく、自然という大きな産褥から誕生する生命であり、その誕生に先立つ陣痛に悩まされた人間だと捉えてよからう。これがいわゆる「生れ出づる悩み」そのものであろう。自然は大きな産褥であるだけに、個性の人間の成長を阻害ことができず、凡ての魂の誕生への祝福を捧げるよりほかはなくなるわけである。したがって、海難に関する緻密な描写を通して有島が最も表現したかったものは、漁夫（人間）の運命に抗う果敢さではなく、過酷な自然条件を背景に輝く人間の生への執着なのである。小説の中で荒れた海はホイットマンの詩に歌われるように、新しい魂の出発するところを象徴的に描かれている。ほかに、『生れ出づる悩み』のエピグラフに掲げられているホイットマンの「炬火」という短詩が想起できる。

我が西北にあたる或る汀の真夜中に、漁夫の一群が見つめながら立っている、漁夫等の前に広がる湖のかなたには、他の漁夫等がいて鮭を突いている、独木舟、おぼろに影めいた一物、それが黒ずんだ水を横切って動いてゆく、燃え盛った炬燵をその舳先に掲げながら。^②

「炬火」の意味についてはすでに宮野光男氏によって指摘されているが、「黒ずんだ虚無の海に浮かぶ独木船は、黒く燃え盛る焰を掲げながら、光明の世界を求めてさまよう魂の象徴である」^③。真夜中にその舳先に燃え盛った炬火が漁夫の頼りであり、勇敢な漁夫達自身をも象徴している。海は真剣に光明へ向かう魂の旅するところとして描かれている。さらに主人公の木本は上の主題にとって打ってつけの人物である。木本は貧しい家族の生活の為に、漁夫の生活を続けなければならなかった。にもかかわらず、「寝ても起きても祈りのようにこの一つの望みを胸の奥深く大事にかき抱いているのだ」。それは芸術への夢であった。有島は木本の「悩み」を自分の悩みと対照しながら、小説の最後の部分で生活と芸術の対立は、つまり個性――本能と環境とのせめぎ合いの中で、必ず真新しい個性の誕生に導か

^① 有島武郎『生まれ出づる悩み』角川書店、1969年、154頁。

^② ホイットマン「炬火」『有島武郎全集』第六巻（有島武郎訳）築摩書房、1980年、255頁。

^③ 宮野光男『有島武郎の詩と詩論』朝文社、2002年、239頁。

れていくと祝福している。「君よ、春がくるのだ。冬の後には春が来るのだ。君の上にも確かに、正しく、力強く、永久の春が微笑めよかし。僕はただそう心から祈る」。このように、有島はこの小説を以って「凡て誕生を待つよき魂に対する謙遜な讃歌を歌」^①った。

ここにいたって、クリッパーの航行を歌うホイットマンの詩「大道の歌」が思い出される。

さあ行かう！誘引はさらに大きいだろう！

私達は水路のない荒海を航海するのだ、

私達は、風が吹き、波は騒ぎ、ヤンキー・クリッパーの快走船が

一杯に帆を張って走っている遥かな所に行くのだ。^②

魂を乗せた船は勢いよく荒海へ走っていく。海は自由な冒険のイメージであるクリッパーと完全に融合した存在となる。一切の束縛を脱して魂の航海を始めよう、ホイットマンは呼びかけている。有島はそれに応じて、また木本に呼びかけているのであろう。したがって、『生れ出づる悩み』における海は、海難の場面は「魂の誕生」を期待する小説の主題を浮き彫りにするのに重要な役割を果たしている。人と海との戦い、木本と運命との闘争は小説の二本の主旋律となり、渾然として一体をなしている。荒々しい海は人間の輝かしい個性が表れてくる場として表現されている。一見すれば対峙した配置のように思われるが、個性の完成と融合した存在であり、いわゆる魂の誕生に先立つ「陣痛」のように描き出されている。有島が特に海難事故において筆墨を惜しまぬ意匠はここにあるのであろう。

^① 有島武郎『生れ出づる悩み』広告文『有島武郎全集』第7巻築摩書房、1980年、361頁。

^② ホイットマン「大道の歌」『草の葉』（有島武郎訳）岩波書店、1979年、45頁。

おわりに

有島は自然に深い愛着を抱いている作家である。親から受け継いでいた内気な、多感な性格の持主なので、少年の有島は早くも絵心をもって自然に心の自由を求めた。後年札幌農学校とアメリカで、それぞれ激しい入教体験をした時にも、ホイットマンとの精神的な出会いの時にも、自然との語らいが絶えることなく行われてきた。

「海」は有島の小説においては単なる背景と見なすことはできず、荒い筆致の中で主人公とともに生きている存在なのであり、主人公の内面、即ち有島の本能的生活への追求と深く関わりつつ、人間の本能的意欲を鮮烈に浮かび上がらせる役割を果たしている。例えば、放埒な大海原の呻吟を聞き取れた早月葉子の心には再生の欲望が再び立ち昇りつつあった。狂暴な海に遭遇した木田の心には「死にはしないぞ」と強く自我の航程を主張した。怒濤のような風に吹かれても、荒れ狂った嵐の中に身を置かれても、葉子も仁右衛門も力のあらん限り運命と戦った、永遠に戦った。葉子の激情、木田の執着、仁右衛門の狂暴、有島は自然の中でそういう人物を塑像し、従来の道德、社会秩序との格闘を通じて、分裂していく人間群像をあらためてとらえ直そうとした。有島はその人達の本能的な意志力に、何より強く心を引かれ、それを雄大な自然とともに表わしてきたのである。自然描写から有島が「本能的生活」を追求する人間であり、「愛」によって人生を生き抜こうとする誠実な作家の姿が伺えよう。したがって、有島の作品における「海」をいかに読み取るのかが真に有島の人と作品を理解する上で一つの鍵だと言えよう。

小論は有島の人と作品から、有島の「自然」について分析してきた。その作品の自然描写が作品に一貫する主題——人間の内的自然、つまり本能への尊重と離れがたく融合し、定着していることが明らかになるだろう。有島の「自然」から、有島は無類の誠実さを持っている作家であり、有島の文学は「書かんが為に生活した人の作品ではなくて、生きんが為に生活した人の作品」^①であることをうかがうことができる。生命に対する真摯な態度、社会に対する良心的な関心を抱きつつ、有島は自己の作品及び人生の世界で彼なりの完成を示しているのである。ここで私はその一読者として心から敬意を捧げる次第である。

^① 内田満『有島武郎—虚構と実像』有精堂、1997年、42頁。

参考文献（例示供参考，完成后请删去红字）

日本語文献：

1. 有島武郎『有島武郎全集』筑摩書房、1980 年。（単行本）
2. 島田雅彦「芥川賞選評」『文芸春秋』103 卷 1 号、文芸春秋、2016 年 3 月、94 頁。
（雑誌論文）
3. ホイットマン『草の葉』（有島武郎訳）岩波書店、1979 年。（訳本）
4. 内田満「有島武郎－虚構と実像」『有島武郎研究会』教育書房、1997 年、97－105 頁。
（論文集）

中国語文献：

1. 刘立善. 日本白桦派和中国作家[M]. 沈阳：辽宁大学出版社, 1995. （专著）
2. [美] 雅克・蒂洛、基思・克拉斯曼. 伦理学与生活（第 11 版）[M]. 程立显、刘建译. 成都：四川人民出版社, 2020. （译作）
3. 黄怡婷. 中日青年作家会议 2010 [J]. 外国文学动态, 2010, 6(3): 46-47. （期刊文章）
4. 马欢. 人类活动影响下海河流域典型区水循环变化分析[D]. 北京：北京大学, 2011. （学位论文）
5. 谢希德. 创造学习的新思路[N]. 人民日报, 1998-12-25（10）（报纸）

インターネット資料：

1. 文部科学省「平成 19 年度全国学習状況調査について」2004 年 4 月 24 日
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku-chousa/zenkoku/0732809/002.htm、2007 年 6 月 20 日情報取得
2. 萧钰. 出版业信息化迈入快车道. (2001-12-19)/ [2002-04-15].
<http://www.reader.com/news/20011219/200112190019.html>.